



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 再開のコミュニケーション : 子供の介入によるインタビュー中断と再開を事例に                                      |
| Author(s)    | 秦, かおり  |
| Citation     | 言語文化研究. 2015, 41, p. 131-148  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/51421">https://doi.org/10.18910/51421</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 再開のコミュニケーション： 子供の介入によるインタビュー中断と再開を事例に<sup>1)</sup>

秦 かおり

## Resuming communication: A case study of resuming after interruptions generated by children in the interview situations

HATA Kaori

**Abstract:** This paper is to clarify how interviews can be resumed after unexpected interruptions generated by children. Through a categorization and analysis of 44 cases of interruptions, two points are claimed: 1) in order to resume the interview, verbal (discourse markers, small stories, repetitions, etc.) and non-verbal communication resources (gestures, eye gaze, bodily motion, etc.) are inevitably required, 2) small stories during the interruption have an essential role, which is one of the processes to lead the interaction to resume the interview. These points will be illustrated with some cases by empirical approach.

キーワード：インタビュー・ナラティブ，中断，コミュニケーション資源

### 1. はじめに

本研究<sup>2)</sup>は、言語・非言語のコミュニケーション要素を、インタビュー中に起こった強制的なインタビュー中断から再開を導く資源として捉えて分析したものである。ここで取り上げるインタビューは、既に1度は同じ環境、同じペアでインタビューを経験したことがある参加者同士で行われており、インタビューに対して協力的で、インタビューを順調に続けて終わらせることを志向している。しかし、そこに、参加者の子供が割り込んで来てインタビューの中断が起こり、流れが滞ってしまう。本稿は、その中断と再開の部分データを分析するものである。分析の結果、インタビュー中の第三者による中断後の再開へ向けたプロセスは、殆どの場合、ある種の方略を用いて達成されることが分かった。ある種の方略とは、言語資源でいえばディスコース・マーカ（discourse marker：談話標識）やスモール・ストーリー（small story）などであり、非言語資源でいえば視線・ジェスチャー、身体の向きなどである。本論文

<sup>1)</sup> 本稿は、2014年9月13日に第34回社会言語科学会研究大会において口頭発表されたものを土台に大幅に改定したものである。

<sup>2)</sup> 本研究は、科学研究費（挑戦的萌芽研究22653060、研究代表者 秦かおり）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

では、実際に中断が起こった箇所を検証し、1) 中断中に単に雑談をしているように見える部分も、インタビュー再開に向けたプロセスの1つになっている可能性があること、2) 再開後には単に中断前の続きが始まっているように見えても、その間にインタビュアーもインタビューも、非言語を含む多くのコミュニケーション資源を活用しており、特に非言語資源が円滑なインタビュー再開に果たす役割が大きいことを示す。本研究のデータで表出したこれら点を検証することで、中断後のインタビュー再開に向けたプロセスを解明する。

## 2. 理論的背景

### 2.1. コミュニケーション資源としての言語的要素

コミュニケーションの言語的要素として、ここではディスコース・マーカースとスモール・ストーリーを取り上げる。今回のデータでインタビューの中断を再開させるために頻出した言語的要素は、ディスコース・マーカースであった。ディスコース・マーカースとは、文と文や話題などの間にあり、転換や展開など、そのマーカースの前後の関連性を示すマーカースである。ディスコース・マーカースは、今回観察された「あの」「でも」「そーそーそれで」「じゃあ」のように、それ単体ではあまり意味をなさないが、談話の文脈を調整するもの (Schiffrin 1987) として、談話の首尾一貫性 (coherence) を構築するために用いられるものである。今回の例でいえば、インタビューの参加者が子供の介入によってインターアクションを中断されたのち、元のインタビューとの一貫性を保ちつつ、インタビュー再開を志向するマーカースとして使用したものと考えられる<sup>3)</sup>。

上記のようにディスコース・マーカースは、先行研究においても談話を繋ぐ、一貫性を保つためのものとして捉えられてきた。一方、スモール・ストーリーは、談話の中断と再開との関連性において論じられることは管見の限り見当たらない。しかし、本研究では後に分析するように、インタビューの中断と再開にスモール・ストーリーが深くかかわる場合があるとし、その理論の概要を述べることにする。スモール・ストーリーとは、ナラティブの標準 (canon)<sup>4)</sup> から逸脱していても、現在進行中の出来事を語ること、未来や仮定の出来事を語ること、ほのめかし、語りの据え置き、語りの拒否などを含む概念である。BambergやGeorgakopoulouらは、それらを語りとして捉えることで、ナラティブ行動全域の中でスモール・ストーリーがどのような役割を果たすのかをナラティブ分析の対象とした (Bamberg 2004; Bamberg and Georgakopoulou 2008)。このことによってナラティブはアイデンティティ構築のプロセスの表出とし

<sup>3)</sup> 今回観察されたディスコース・マーカースは、「あとは」「そっかー」「あの」「でも」「えっとあと」「そうですね」「で」「そう、そうすると」「そうそうそれで」「そいでじゃあでも」「んー」「いいっすか」「じゃちょっと」など。それ以外に、反復 (repetition) も再開のディスコース・マーカースとして観察された。

<sup>4)</sup> ナラティブの標準 (canon) とは、「過去の経験を再現するための1つの言語的技法」(Labov and Waletzky 1967) であり、一連の流れ (「要約部 (abstraction)」から始まって、「方向付け (orientation)」, 「複雑な行為 (complicating action)」へと進み、「結末部 (resolution)」でその結末を示し、「評価 (evaluation)」を行い「終結部 (coda)」で聞き手を現在に戻す) があるものとされた。

て捉えられ、ナラティブ研究はアイデンティティ研究へと転換することが可能となったのである（Bamberg 1997; De Fina 2003; De Fina, Schiffrin and Bamberg 2006; De Fina and Georgakopoulou 2012, Georgakopoulou 2001, 2011）。本稿においては、子供が介入して中断が始まってから終わるまでの間を詳細に分析し、その間にインタビュアーとインタビュイーが何をどのように行っており、それはどのような機能を果たしているのかを考察する。

## 2.2. コミュニケーション資源としての非言語的要素

ここで取り上げるコミュニケーション資源としての非言語的要素は、視線、ジェスチャー、身体の向きなどである<sup>5)</sup>。McNeil (1992) は手で行われるジェスチャーを詳細に分類し、2005年の論考では談話の中のジェスチャーを包括的に分析している。喜多 (2002) は、社会的契約以外の要素（例えば「エンブレム」）によって生起する（視線配布を含む）ジェスチャーを「自発的ジェスチャー (spontaneous gesture)」<sup>6)</sup>と呼び、これを更に細分化した<sup>7)</sup>。これに対し、ジェスチャーが何をしているか、という視点ではなく、視線、身振りと言語を一体化させて民族詩学的に論じたのは片岡 (2008, 2011, 2013) であり、本稿もこれらの先行研究に従い、コミュニケーションは言語によってのみ行われるのではなく、非言語的な要素も共に分析する必要性を唱えるものである。

## 3. データ

本稿で用いられる研究は2007年から始まったインタビュー調査の一部である。今回分析対象として取り上げるのは2011年と2012年に行われたインタビューのうち7組（単独インタビュー4件、ペア・インタビュー3件）の調査結果である。これらのインタビューの基礎情報は表1の通りである。

表1 インタビューの基礎情報

|      |                           |
|------|---------------------------|
| 調査対象 | 30歳代～40歳代までの永住権を持つ在英邦人女性  |
| 調査地  | 英国ロンドン南東部                 |
| 件数   | 7組（単独：4件、ペア：3件）           |
| 長さ   | 合計6時間38分（1件40分～1時間半程度）    |
| 状況   | 子どもは同じ家の他の部屋など、アクセス可能な状態。 |

2007年より始めた本調査は、日本人女性に出産・育児体験を聴くという主旨のものであったため、インタビュイーは全て女性である<sup>8)</sup>。2010年より、日本在住の女性との比較として、在英邦人のインタビュー調査を始めており、本稿はそのインタビュー調査結果を使用してい

<sup>5)</sup> マルチモダリティについてはGoodwin (1981), Heath (1986) 参照。

<sup>6)</sup> 自発的ジェスチャーと対になるカテゴリーは、「ピースサイン」のように形と意味が社会的慣習として定まっているジェスチャーで、通常「エンブレム」と呼ばれる（喜多2002）。

<sup>7)</sup> 細分化された詳細な観察という意味では細馬 (2008) 参照。

<sup>8)</sup> 比較として、調査対象となった女性の夫にインタビューを実施することもある。

る。2011年には広く出産・育児体験について話をしてもらい、前年のビデオを見せてフィードバックをもらうなどの調査を行った。2012年には震災をテーマとした調査に切り替え、前年のフィードバックに加えて、「震災って、どうでした？」という非常に漠然とした質問から始まり、自由に語ってもらう半構造化インタビューの形式をとった。このように、出産・育児体験について語ってもらうという調査から始まったため、インタビューの場に子供を連れて来てもらいという条件になっており、その場に子供が存在し、介入してくることが容易な状態であった。

インタビューは対面形式で行われ、アクティヴ・インタビュー<sup>9)</sup>の理念に従って実施された。インタビュアーは、インタビューへの促し、確認などを積極的に行う相互行為者であり、語りの協働構築者であると捉えられるため、インタビュアーの行為も分析対象としている。また、インタビューは原則としてインタビュー者がくつろげる空間で行われ、全て録画録音された。

#### 4. 分析

本稿で扱うインタビュー・データ 6 時間38分のうち、子供の介入は44カ所観察された。この44カ所の、子供の介入から再開までのプロセスを分類すると下記ようになる。

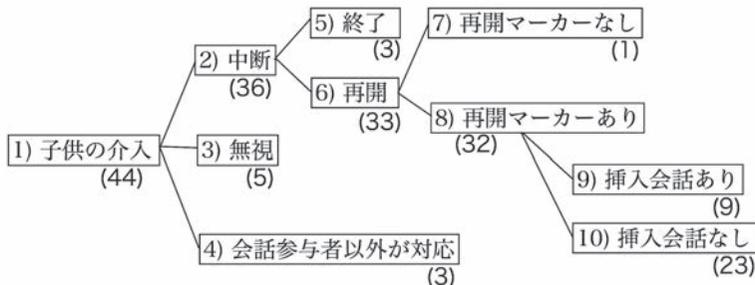


図1 子供の介入後のプロセス

各項目末尾のカッコ内の数値は観察された場面件数である。1) 子供の介入は44カ所観察されたが、それは2) 中断 (36件)、3) 無視 (5件)、4) 会話参与者以外が対応 (3件) に分類される。「中断」は子供が介入して来たことによってインタビュー中のインターアクションが中断されたことを示す。「無視」は子供が介入して来ても、インタビュー参与者全員が無視して全く相手にせず、そのうちに子供が諦めて去って行った場合である。また、「会話参与者以外が対応」は、2対1のインタビューでインタビュー者が2名いる場合に、インタビュアーと

<sup>9)</sup> アクティヴ・インタビューとは、インタビュアーもインタビューの場における相互行為の参与者であり、インタビュアーは質問をするだけの存在ではなく、多くの語りかけやインタビューの経験への評価付けなどに関与するという考え方 (Holstein 1995) で、インタビューの言説だけでなくインタビュアーの言説も分析対象とする理念である (山田 2011)。インタビュー調査の捉え方の変遷については Briggs (1986)、Gorden (1987)、桜井 (2002) などをまとめた秦 (2013) 参照。

インタラクティブをしている者以外の1名がその子供に対応し、インタビューの会話そのものは止まらなかった場合である。

次に、「中断」が起こった例をさらに分析すると、5) 終了(3件)、6) 再開(33件)に分類される。「終了」は、中断後にそのままインタビューを再開できずに終了させた場合であり、本来はもう少し聞きたいことがあっても、子供の我慢が限界であるなどとインタビュアーが判断し、インタビューを終了している場合である。「再開」は一旦インタビューのインタラクティブが中断され、子供に一定時間費やした後にインタビューが再開された場合である。

この「再開」を、より詳細に分類していくと、7) 再開マーカーなし、8) 再開マーカーありに分類される。しかし、「再開マーカーなし」に分類されたのは1件のみで、それも再開のマーカーは言語的・非言語的に観察されないものの、再開の直前に終了のマーカーが存在していることが分かる。他は全て言語・非言語どちらかあるいは両方の、何らかの「再開マーカー」が生起することが観察された。

さらに、再開マーカーがあるもののうち、子供による会話の中断が行われてからインタビューに戻るまでの間に、子供との会話ではない、インタビュー参加者同士のスモール・ストーリーを伴う挿入会話が行われていた例が9件確認された。これを、9) 挿入会話ありとして分類している。

以下では、これらのうち顕著な例として、(1) 言語マーカーと非言語マーカーの両方がある典型的な例、(2) 言語マーカーと非言語マーカーの両方があるが使用法に特徴がある例、(3) スモール・ストーリーが挿入されている例の3点を取り上げて詳しく分析していく。

#### 4.1. 言語マーカーと非言語マーカーの両方がある典型的な例

通常、インタビュー中に中断が入った後に再開する場合、再開を促す者は何らかの言語マーカーと非言語マーカーを発する。例1はその典型例である。1対1のインタビューで第2子を抱いたインタビュー어가その子供を産んだ時の体験談を語っている場面で、部屋の隅で遊んでいた第1子ゆうたが、机の上のお茶をもらうために割り込んでくる。例の中の「とたあ」とはゆうたのことばで「お茶」を表す<sup>10)</sup>。

例1)

1. まいこ： 1人目は(.)母乳とミルクの[(.)ミックスだったんですけど
2. ゆうた： [とたあ↑ とたあ↑
3. かおり： あ(.)そーです…
4. まいこ： この子は完全母乳だったので[変化があるんですね：

<sup>10)</sup> ゆうたはインタビュー時まもなく3歳であったが、父親がイギリス人であるため日常会話は英語と日本語が交じる状態で、「tea」は発音できても「お茶」はまだ上手く発音できない状態である。

5. ゆうた： [とたあ↑ とたあ↑
6. かおり： ん：：
7. まいこ： あるよ
8. ゆうた： とたあ↑
9. まいこ： とーたがあるよ↑ ここに
10. ゆうた： とたあ↑
11. まいこ： ん どおぞ ここにあるよ↑
12. お茶どうぞ↑
13. ゆうた： Tea!
14. まいこ： うんteaね
15. ゆうた： Hot tea
16. まいこ： 熱くないもう
17. あつくない[よ：：
18. かおり： [°あとは° (.) おうちの  
( (ゆうたをみている) )
19. [日本の方 (.) お母様とか  
[ ( (まいこの方を向く) )
20. まいこ： [ ( (かおりの方に向き直る) )
21. かおり： いらっしゃったんですか
22. まいこ： はい 母が (.) えと 来た日に  
産まれたので

この例では2行目からゆうたの介入が始まっているが、6行目まではインタビュアーもインタビュイーも無視して話を進めようとする。しかし、ゆうたが何度も「とたあ」を繰り返すため、ゆうたの母親であるまいこが7行目でゆうたに机の上に置いてあったお茶を与え、インタビューの中断が始まる。中断から再開までの非言語要素を分析すると図2のようになる。

ゆうたとまいこの会話の最中、かおりは18行目の再開のマーカである「°あとは°」と発する時もまだゆうたを見ている。さらに「おうちの (18行目)」と発話を続けながら19行目でまいこの方に向き直り、同時にまいこもかおりの方を向き直ると、インタビューが再開されることになる。

この例では、中断された事案(子供がお茶を飲みたいという件)がある程度落ち着くまで待つてから、インタビュアーが主導してインタビューの再開を促している。Goodwin (1980)によれば、話し手は発話を始めた後に、聞き手の視線を獲得するまで発話の続きを引き延ばしたり、反復(repetition)を行ったりして聞き手の視線を獲得した後に発話を終結させる。本例も、イ



1.「お茶どうぞ」(12行目)



2.「あとは」(18行目)



3.「日本の方」(19行目)

図2 インタビュー参加者の視線の変化

インタビュアーであるかおりが、まいこの視線を獲得する前に「°あとは°(18行目)」と発話を開始し、まいこの視線を獲得して、発話を終結させている。この点においては、Goodwinの日常会話の例と類似している。しかし、本例では、本来語りを中断させられたのはまいこであり、話の続きを始めるのもまいこのはずであった。つまり、「話し手」「聞き手」という観点からいえば、まいこが「話し手」であり、かおりが「聞き手」であるはずであるのに、本来「聞き手」であるはずのかおりが主導し、しかも「°あとは°(18行目)」と発話して、元の会話の続きに戻らずに話をずらしている。このことは、インタビューの基本構造として、インタビュアーが場の主導権を握っており、話題転換や開始・終了の合図はインタビュアーが行うというジャンル性が関係していると考えられる。

#### 4.2. 言語マーカーと非言語マーカーの両方があるが使用法に特徴がある例

上記の例に比べて、言語マーカーと非言語マーカーの使用に特徴があるのが次の例2である。この例は1対1のインタビューで、インタビュイーの自宅1階で行われた。2階には第2子である0歳児が寝ており、インタビューのテーブル上には赤ちゃんセンサー(2階に設置してあるマイクが赤ちゃんの泣き声や動きの音を拾い、1階のスピーカーに流すもの)が設置してある。例2の直前では、インタビュアーが日英の家庭の中での役割分担意識の調査結果について説明し、インタビュイーであるまきに見解を求める予定であったところに、0歳児が目覚めて中断が始まる。

例2) インタビュイーが非言語マーカによって再開を促す例

1. かおり : 時間がある (.) 人がやるとか[ : :
2. まき : [んん
3. かおり : あの : : : (. ) [ま男性が例えば ま  
(赤ちゃんセンサーのノイズ)
4. 子供 : [んん : : : :
5. かおり : (0.3) だいじょぶ↑
6. まき : 泣きましたね=
7. かおり : =起きました↑
8. まき : 起きましたね
9. かおり : であ行ったほう-よ-  
だいじょぶですか (1.2)
10. まき : 起きちゃったかな  
(3.0)
11. 子供 : うう : : [ : : : :  
(赤ちゃんセンサーのノイズ)
12. まき : [起きましたね=
13. かおり : =はい 起きましたね
14. まき : ちょっと  
すみませ[<sub>1</sub>ん 連れて[<sub>2</sub>きますね  
[<sub>2</sub> ((立ち上がる))
15. かおり : [<sub>1</sub>はいはい行って来てはい  
-----中略-----
16. まき : ん こいてもいいですか=
17. かおり : =あええ勿論勿論全然[大丈夫です=
18. まき : =大丈夫ですか↑ [んしよ
19. [ (2.3)
20. かおり : [ ((赤ちゃんを覗き込む))
21. まき : [ ((赤ちゃんの顔を見る))
22. まき : ほら↑ (1.0)  
hいひひ[ひひひ
23. かおり : [あ@ (. )  
ちょっとにっこりって笑った
24. まき : ((PCの画面と子供を交互に見る))

25. かおり： ((姿勢を戻し下と子供を交互に見る))  
 26. まき： ((目線をPCに移す))  
 27. かおり： そーそーそれでなんかあの (1.2)  
           hなんかどっちが(.)どっちの役割を

この例では、3行目で赤ちゃんセンサーのノイズが入り出し、その後も16行目までは0歳児は登場しないが、インタビューのためのインターアクションは3行目以降中断され、子供に関するやり取りが始まっている。16行目で0歳児が登場した後、初対面だったかおりは子供とのやり取りにしばらく終始し、まきも子供に挨拶をさせようと、「ほら(22行目)」と促したりしている。

この例が他の例に対して特徴的であったのは、その後の言語・非言語要素のターンの取り方である。例1で示したように、本研究の分析例では、再開のマーカースとしての言語・非言語要素は同一人物によってほぼ同時に発せられ、インタビュー再開となる。インタビューの基本構造でいえば主導権を握っているインタビュアーが再開のマーカースを発することになるが、この例ではまず、24行目でまきが先にPCの画面と子供を交互に見始める。この時のインタビューは、前年のインタビュー結果を振り返って新たに見解を求めたりフィードバックを受けたりしているもので、PCの画面には前年のインタビューの様子が映っており、PCの画面を見るという行為は、インタビュイーが、そこがインタビューという場であるという意識を持っていることを示している。一方で、今現在進行中の会話は、自分の子供とインタビュアーを初めて対面させている親としての役割を生起させているため、PCの画面と子供を交互に見るという行動に現れたと考えられる。つまり、そこがインタビューの場であるという気づき、再開への促しの始まりは、インタビュイーであるまきから始まっていると捉えることができる。このまきの行為に気が付いたインタビュアーは子供に向けて前屈みになっていた姿勢を戻し、PCを見始める。姿勢を戻すという身体行動は、子供から自分との身体的距離を離すと同時に、介入前の状態、すなわちインタビューの場へと自分の身体的な位置を「戻す」行為である。しかしこの時もまきと連動する形で子供とPCを交互に見るという行為を行っており、完全にはインタビューを再開できていない。そこで、26行目でまき子供から完全に視線を外してPCを見つめ続け始めたことで、ようやくインタビュー再開に向けて、かおりが言語的な再開のマーカースである「そーそーそれでなんかあの (27行目)」と言い、インタビューを再開する。

Goodwin (1980) で見られた例は、話し手が聞き手の視線を獲得する前に話しだし、聞き手視線を獲得するまでターンをとり続けるというものだったが、本例ではそれとは異なり、まず視線でのやり取り、しかも聞き手からの視線でのやり取りから始まり、何度も促しがあった後によりやく話し手が語りを再開している。言語的要素だけを分析していると、通常のインタビューの基本構造の通りにインタビュアーが主導権を握っているように見えるが、非言語要素も合わせて分析すると、インタビュイーであるまきが先に再開への志向を示し、それに先導さ



1. PCの画面を見る（インタビューーはまだ赤ちゃん  
を見ている）（24行目）



2. PCと赤ちゃんを交互に見る（インタビューーも  
PCを見始める）（24, 25行目）



3. 両者とも PCの画面を見る（27行目）

図3 インタビュー再開に向けた視線の動き

れる形で、インタビューーがインタビューを再開したことが分かる。

#### 4.3. スモール・ストーリーが挿入されている例

前述の例1と2は、両方とも中断が比較的短いものである。しかし、図1で表したように、挿入会話があるものが9件あり、それは比較的長い中断を経て、インタビューを再開している。次の例3はその1例で、中断中に2つのスモール・ストーリーが挿入されている。この例は、インタビューーのかおりが放射能汚染に対する日本人の反応と自分の体験を話し、英国でどう報道されていたかをまきに聞こうとしている場面である。そして3行目でかおりの子供が怪我をした状態でインタビューの場に現れ、中断が始まる。

##### 例3) スモール・ストーリーが挿入されている例

1. かおり： ただ あの：：丁度わたし：がいた
2. 地域：：のそばで
3. (かおりの子供が「ケンケン」をしながら登場)
4. まき： ((かおりの子供を振り返って見ている))
5. かおり： [なあと↑  
[((子供の方を見る))]
6. りか： ん：：ん
7. まき： ガリってしちゃった↑

8. かおり： (1.7) あらあ[らどうしたのこれ↑
9. まき： [あー
10. りか： ぶらんこで(.) 落ち[た=
11. まき： [落ちちゃったか
12. かおり： =落ちたの
13. りか： ほら：：
14. かおり： 痛かったね：：
15. よちよちだいじょぶだいじょぶ
16. りか： ん：：ん
17. まき： れなちゃんにさあ：：ばんそこ(.)
18. ばんそこもらってきたら↑
19. まき： ね
20. りか： ((うなずく))
21. かおり： じゃあ行ってきて下さい
22. まき： れな：：(1.2) れなさんどこにいる
23. まだお庭にいる↑ (3.0)
24. 大丈夫かな
25. かおり： だいじょぶ
26. あれく[らいの傷はしょっちゅう
27. りか： [まだお庭にいます( )
28. まき： でも昨日(.) ここの家に2月の終わりに
29. 引っ越してきて
30. かおり： うん
31. まき： 全然ガーデニングをしてなくて
32. かおり： あ(.) そーなん(.) ですか@ <スモール・ストーリー1>
33. まき： ちょっと
34. ジャングル[っぼくなっていたので
35. かおり： [@@@@@
36. まき： ちょっと昨日切ったんですね(.)
37. いろいろ
38. かおり： あ そーなん
39. まき： それをきちんと片付けてなかったの
40. かおり： まあだいじょぶ あれ°くらの…°

|         |                         |                |
|---------|-------------------------|----------------|
| 41.     | 娘はあの：：比較的ちゃんと (.)       |                |
| 42.     | いろんな状況を見て               |                |
| 43.     | し (.) 危険がないように (.) するので |                |
| 44. まき  | ： え                     | <スモール・ストーリー 2> |
| 45. かおり | ： あの子はそんなに心配ないですけど      |                |
| 46.     | 息子のほうは (.) ちょっと         |                |
| 47.     | 状況判断が悪くて                |                |

----- 中略 -----

48. まき : れなちゃんほりかちゃんガリッてしちゃったから (.)  
ばんそこあげて一枚
49. れな : [<sub>1</sub>はい]  
[<sub>1</sub> ((振り返らずに [<sub>2</sub> ドアから出て行く))
50. かおり : [<sub>2</sub> はい°]  
[<sub>2</sub> ((れなを一瞥して PC の方に向き直る))
51. まき : [<sub>2</sub> ((れなから目を離しかおりの方に向き直る))
52. かおり : じゃちょっと

この例では、3行目で中断が始まってから27行目までは子供が会話に関わっている。しかし、28行目からは子供がその場から離れているにもかかわらず、インタビューに戻らずに2つのスモール・ストーリーが挿入されている。47行目から48行目の間では、まきとかおりの子供合計3人がインタビューの場に再び乱入し、それを収束させインタビューの場から子供達を追い出すために、まきがれなに絆創膏を取って来るように促し、他の子供達もそれと同時にその場から去って行く。再開のマーカ―はインタビュア―の「じゃちょっと (52行目)」となっている。

ここでスモール・ストーリーが挿入された理由を分析するためには、語られている命題内容に注目する必要がある。まず3行目で怪我をして入って来たのはかおりの子供(りか)であり、大した怪我ではないが、一応絆創膏を貼っておいた方がよい程度のものであった。そこで、まきは自分の子供であるれなに絆創膏を渡させようと、りかに提案する(17行目)。しかし、怪我の具合が心配であったのか、絆創膏が本当に渡されるか不安であったのか、「大丈夫かな(24行目)」と発言する。それに対してかおりが「だいじょぶあれくらいの傷はしょっちゅう(25, 26行目)」と返答しているにもかかわらず、まきは、引越以来庭の手入れをしておらず、前日に手入れをした枝などがそのまま放ってあったので、それが怪我の原因ではないか(スモール・ストーリー 1)とかおりに告白する。かおりはそれを受けて、もう一度「まあだいじょぶあれくらいの…(40行目)」と言いますが、怪我の程度の話ではなく、まきのスモール・ストーリー 1に対して別のスモール・ストーリー 2を持ち出し、「息子の方はちょっと状況判断が悪く

て(46, 47行目)と話をそらしている。この会話のプロセスをまとめると、「怪我→心配の表明→心配の否定→謝罪(原因の告白, 心配の否定の否定)→話題の転換」となっており、怪我に始まった一連の出来事を収束させるためのスモール・ストーリーの挿入であることが分かる。

この例でもう一つ特徴的なのは、再開の言語的マーカー「じゃちょっと(51行目)」の前に、「はーい(49, 50行目)」の反復があることである。この「はーい」の後、まきとかおりはPCの方に向き直るという行為でインタビュー・フレーム(interview frame)<sup>11)</sup>に戻ることを非言語的に表している。この反復の機能については考察で述べることにする。

## 5. 考察

### 5.1. ディスコース・マーカーの必要性

上記の例で述べて来たように、本稿で用いられた44件のうち再開があった33件中、32件で再開のディスコース・マーカーが観察された。従って、インタビュー再開に際しては殆どの場合、語用論的に(話されている内容にかかわらず)ディスコース・マーカーが必要であることは考察できる。しかし、インタビュー再開のマーカーをインタビュアーとインタビュイーのどちらが述べるのかという点に関しては、通常のインタビューの基本であるインタビュアーが主導権を握るという構造を必ずしも踏襲しない。これは、本研究のデータの特徴が関係していると考えられる。本調査のデータにおける子供の介入は全て、インタビュアーかインタビュイーの子供によって行われている。すなわち、介入して来た子供の保護者がその場にいる状態であり、その保護者が中断の責任を負う形で再開行為を行う場合がある。例2はその典型例である。インタビューの中断をもたらしたインタビュイーの母親は非言語的資源を使用し、再開への志向を示している。インタビュー・フレームでの役割であるインタビュアーとインタビュイーという関係性よりも、母子という責任の所在が優先されたと考えられる。このことから、インタビュー・フレーム内でのインタビュアーとインタビュイーという役割は固定されていても、本来、「インタビュアーに期待されている行為」をインタビュイーが行うというような、「揺れ」が外的要因によって生起するといえるだろう。

### 5.2. スモール・ストーリーの必要性

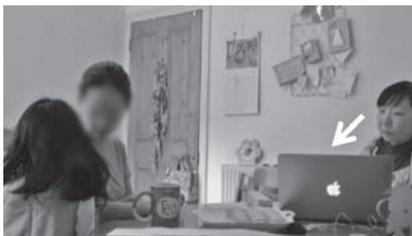
上記のディスコース・マーカーに比べ、インタビュー中断中のスモール・ストーリー挿入は32件中9件と3分の1以下であり、語用論上も談話の構造上も、必ずしも必要ではない。これらを分析した限りにおいては、会話の内容や状況次第で挿入の適切・不適切が決まってくる。これは、会話参加者がその場の基本的な関係性(インタビュアーとインタビュイー)を超えて会話の内容から関係性に不均衡(imbalance)が生じた場合に、それを是正するために挿入され

<sup>11)</sup> Frame (フレーム) については、Tannen (1993a, b, 2005) 参照。

たとえられる。例えば、例3においては庭で怪我をさせた家主と怪我をした子供の保護者という関係性がインタビューの場の関係性に被さる形になり、それを是正した上でインタビューの場に戻る志向性が働いたと考えられる。また、別の例では、介入して来たインタビューの子供が左利きであることを指摘したインタビュアーに対し、インタビューが矯正に失敗したと告白し、インタビュアーが慌てて「最近矯正する必要はないと言われている」と付け加え、自分の兄も左利きであるというスモール・ストーリーを挿入する場面があった。これも、インタビュアーとインタビューという関係性に、左利きをマイナスに考えるインタビューに対してインタビュアーがそれを指摘してしまったために不均衡が生じ、それをスモール・ストーリーで是正するまでインタビューに戻れなかった例である。このように、スモール・ストーリーは談話のレベルで見た時に初めてその存在の適切性が明らかとなる。

### 5.3. 反復の談話的機能

以上のように、再開のためのディスコース・マーカースとスモール・ストーリーについて考察してきたが、その他にも、中断と再開の前後に反復が観察された。その1例が、例3に見られる「はい（例3, 49行目）」、「°はい°（例3, 50行目）」である。Tannen (1989) によれば、反復は複数の機能を持つが、その1つがendingのコードである。会話分析においても、反復はそれ以上交換すべき情報がない時に用いられ、その結果会話終了の合図となるといわれる。しかし、例3の「はい」を非言語的要素も含めて考察すると、必ずしもendingあるいは交換すべき情報がないことを示唆しているのではないことが分かる。下記の図4は、中断終了直前と再開時の非言語要素を図式化したものである。1.と2.が「はい」の反復となっている。



1. 「はい」（れな）。母親のことばに対する返答。インタビュアーであるかおりは二人を見ていない。



2. 「°はい°」（かおり）。れなの方をみながつぶやいている（れなは左側の椅子の後ろにフレームアウトしている）。



3. 再開のマーカース「じゃちょっと」の前に、かおりの「°はい°」後、すぐに二人とも向き直っている。

図4 反復と再開の例

上記のように非言語的要素も併せて分析すると、まず、インタビュアーであるかおりは、れなの方を向いて「°はーい°」と言っているが、その声は小さなつぶやき声であり、小走りに隣の部屋へ絆創膏を取りに行こうとしているれなと積極的に会話をしようとして発話しているとは考えられない。また、れなも、かおりの「°はーい°」に対して一切返答することなくドアを開けて去って行っており、インタビュイーであるまきは、この「°はーい°」を合図にPCの方に向き直っている。このことから、この「°はーい°」は、れなのことばを反復しているが、れなと会話をするために発せられた語ではなく、状況転換を承認するための反復だったのではないかと考えられる。

## 6. まとめ

本稿では、インタビュー中に子供が介入して起こった中断とそれを再開するためのプロセスを観察し、再開のためには殆どの場合何らかのディスコース・マーカーが必要であり、それは言語・非言語的要素の両方を観察することによって初めて全容の解明が可能となること、また、談話のレベルで観察すると、参与者同士の不均衡を是正するためにスモール・ストーリーを用いることを述べた。インタビューという固定された状況で、インタビュー参加者の子供が介入して来るというケースばかりを収集して分析した結果であり、この状況下においては、インタビュアーとインタビュイーという関係性の中でも、子供に関する責任の所在や気遣いといった母親同士の関係性が介在せざるを得ない状況に陥ると、本来インタビュアーに期待されている行為をインタビュイーが主導するなどの揺れが生じることが分かった。特に本稿で取り上げた例においては、言語的要素だけでなく非言語的要素も併せて分析することで、人はことばを話しながら、あるいは沈黙しながらも、ことばとは異なるメッセージを相手に伝え、そして相手もその意味内容を受け取っている様子が浮き彫りとなった。これは、言語的な分析に頼りがちなナラティブ研究において、マルチモーダル分析を取り入れる必要性を強く訴えるものである。今後は、現在はほぼ一括りにしている言語的なディスコース・マーカーを詳細に分類すること、日本で収録された調査結果との比較、さらに、英国で収録した英国人へのインタビューにおける中断・再開の分析を行っていきたい。

### トランスクリプト記号

|      |                   |
|------|-------------------|
| [    | オーバーラップ開始部        |
| (.)  | マイクロポーズ           |
| (..) | 0.5秒以上のポーズ        |
| =    | 続いて聞こえるように発話された箇所 |
| ↑    | 上昇イントネーション        |

|         |   |
|---------|---|
| …       | 言いよどみ                                     |
| @       | 笑い  |
| :       | 長音（音の引き延ばし）                               |
| °°      | 他の箇所よりも小さく聞こえる語                           |
| h       | 呼気  |
| ( )     | 著者による補完                                   |
| ( ) 内空白 | 聞き取り不可能な語                                 |
| (( ))   | ジェスチャーなど身体動作<br>その上の行の発語とジェスチャーの始点を合わせている |
| 下線      | 著者による分析上の強調                               |

### 参考文献

- Bamberg, Michael (1997). Positioning between structure and performance. In Michael Bamberg (ed.). Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis, *Journal of Narrative and Life History*, 7, 335–42.
- Bamberg, Michael (2004). Talk, small stories, and adolescent identities. *Human Development*, 47, 331–53.
- Bamberg, Michael and Alexandra Georgakopoulou (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text and Talk*, 28 (3), 377–396.
- Briggs, Charles (1986). *Learning how to ask: A sociolinguistic approach of the role of the interviewer in social science research*. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Fina, Anna (2003). *Identity in narrative: A study of immigrant discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- De Fina, Anna, Deborah Schiffrin and Michael Bamberg (eds.). (2006) *Discourse and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Fina, Anna and Alexandra Georgakopoulou (2012). *Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives*. London: Cambridge University Press.
- Georgakopoulou, Alexandra (2001). Arguing about the future: On indirect disagreements in conversations. *Journal of Pragmatics*. 33, 1881–1900.
- Georgakopoulou, Alexandra (2011). Narrative Analysis. In Ruth Wodak, Barbara Johnstone and Paul Kerswill (eds.) *The SAGE Handbook of Sociolinguistics*. pp.386–411. London: SAGE.
- Goodwin, Charles (1981). *Conversational organization*. New York: Academic Press.
- Goodwin, Charles (1980). Restart, Pauses, and the Achievement of a State of Mutual Gaze at Turn-Beginning. *Sociological Inquiry*. 50, 3–4, 272–302.

- Gorden, Raymond L. (1987). *Interviewing: Strategy, techniques, and tactics*. Homewood, IL: Dorsey.
- 秦かおり (2013).「国外在留邦人が語る東日本大震災：対面の場における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する」『言語文化研究』第41号, pp. 123-142.
- 秦かおり (2014).「子どもの介入によるインタビュー中断とその回復にみるコミュニケーション資源の活用について」第34回社会言語科学会研究大会発表論文集. pp. 38-41.
- Heath, Christian (1986). *Body movement and speech in medical interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Holstein, J. A. and Gubrium, J. F. (1995). *The Active Interview*. London: Sage Publications, 山田富秋他訳 (2004).『アクティヴ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房.
- 細馬宏通 (2008).「発話とジェスチャーはいかに話題の視点を表現するか？－日本語における左右概念を巡る個人内・個人間相互作用」篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』pp.37-68. ひつじ書房.
- 片岡邦好 (2008).「身体の詩学」による共創という視点. 片岡邦好・池田佳子編『コミュニケーション能力の諸相：変移・共創・身体化』pp.229-257. ひつじ書房.
- 片岡邦好 (2011).「間主観性とマルチモダリティ：直示表現とジェスチャーによる仮想空間の談話的共有について」『社会言語科学』14 (1), 61-81.
- 片岡邦好 (2013).「行為と知覚のナラティブーテレビCMのマルチモーダル分析から－」佐藤彰・秦かおり編『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』pp. 273-93. ひつじ書房.
- 喜多荘太郎 (2002). *ジェスチャー—考えるからだ (身体とシステム)*. 金子書房.
- Labov, William and Joshua Waletzky (1967). Narrative analysis. In J. Helm (ed.), *Essays on the Verbal and Visual Arts*, 12-44. Seattle, WA: University of Washington Press.
- McNeil, David (1992). *Hand and mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNeil, David (2005). *Gesture and thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- 桜井厚 (2002)『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Schiffrin, Deborah (1987). *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, Deborah (1989). *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*, Cambridge England ; New York: Cambridge University Press.
- Tannen, Deborah (1993a). What is a Frame?: Surface Evidence for Underlying Expectations. Deborah Tannen (ed.) *Framing in Discourse*. (14-56) New York, Oxford: Oxford University Press.
- Tannen, Deborah and Wallat, C. (1993b). Interactive Frames and Knowledge Schemas in Interaction. Deborah Tannen (ed.) *Framing in Discourse*. pp. 57-76. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Tannen, Deborah (2005). *Conversational Style: Analyzing Talk Among Friends*. New York: Oxford Uni-

versity Press.

山田富秋 (2011). 『フィールドワークのアポリア：エスノメソドロジーとライフストーリー』  
せりか書房.